

きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践

— 教育学部の大学生アシスタントティーチャー（AT）を活用した試みから —

薩本弥生*¹・川端博子*²・堀内かおる*¹・扇澤美千子*³・斉藤 秀子*⁴・呑山 委佐子*⁵

*1 教育学研究科・*2 埼玉大学教育学部・*3 茨城キリスト教大学生生活科学部・

*4 山梨県立大学人間福祉学部・*5 大妻女子大学短期大学部

1 諸言

現在の衣生活は、旧来の家庭で衣服を作る時代から、既製服を選んで購入する時代となった。日常着が洋装化し、既製服が普及した今日、きもの文化に触れる機会もめっきり減り、これらの技術や文化が若者に理解されにくくなりつつある。一方、2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された¹⁾。この規程を受け、2008年3月の学習指導要領告示では、国際社会で活躍する日本人の育成のため、我が国の郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承、発展させるための伝統や文化に関する教育の充実を図ることが求められている。そして、中学校の技術・家庭科の衣生活分野では「和服の基本的な着装を扱うこともできること」が盛り込まれた²⁾。すなわち、日本の伝統文化である和服について着装も含めて理解するための教育、すなわち「きもの」文化をどのように教育していくかについての検討、新しい教育のデザインが必要となってきている。

著者らは、以上のような背景から「きもの」文化を取り扱う新しい教育デザインとして、平成21年度から23年度までの3年間、中学校や高等学校での家庭科の授業の中で「ゆかた」の着装体験を含めた体験型の学習を通じて日本の子どもたちの心に「きもの」文化を尊重し継承・発展する芽を育て、「きもの」文化に対する理解を深める体験型教育プログラムの開発に取り組んできた³⁻¹⁰⁾。

初年度の授業研究¹¹⁾では、中学校におけるゆかたの着装を題材とした授業実践とアンケート調査により、ゆかたの着装という体験学習を含む授業は、きもの文化への興味関心を喚起し、日本の伝統文化の伝承に一定の効果があることが示唆された。しかし、限ら

れた授業時間で効率よく着装技能を習得させるには、ゆかたや着装に関わる教材の充実と、授業で学ばせたい内容について、授業プランの検討が必要であること、ゆかた着装的効果的な学習のため、教師のきもの文化に関わる指導力養成が重要であることが推察された。

2年目の授業研究¹²⁾では、「一人で着ることができる」を学習の目標とし、着つけはペア学習を採用し、生徒全員がゆかたを着装した。着装前の説明用教材として動画資料を採用し、帯結びが難しいとの先行事例を踏まえて¹¹⁾事前練習を組み込み、着つけの理解向上に結びつくよう配慮した授業実践を行った。その結果、ペア学習が共に学び支え合う機会になり、繰り返しによる定着の点からも有効であることが明らかとなった。しかし、写真撮影した着装状態の出来栄を評価を事後にペアの生徒による自己・他者評価と教師評価を行い、教師の評価と比べて生徒による自己・他者評価の一致度が低く、生徒による評価は十分に客観的でなく、着方の改善と向上を導く指導法に課題が残った。

また、これまで3年間にわたり、免許状更新講習等の教員研修を実施し、「きもの」文化に関わる意識啓発と知識と技能に関わる指導力向上を目指す試みを実施してきた¹⁰⁾。さらに、将来、教員になる本学の大学生の指導力向上の一環として被服製作実習その他の場を活用して学生の「きもの」文化に関わる知識と技能養成に向けた取り組みも実施した¹⁰⁾。授業実践後の感想や教員研修でのアンケート調査では、着装実習の教師一人での実践に対し、困難であるとする意見が多く、授業者を補助する体制の整備が不可欠であることが明らかとなった。

そこで、本研究では、ゆかたの着装を含む体験的学習を通し、きもの文化を次世代に継承する家庭科の教育プログラムを開発し、その学習効果を検証することを目標とし、ゆかたの着装実習においてアシスタント

ティーチャー（以降、AT と略す）の活用を特徴とする授業実践を行った。今回 AT には大学教育学部で事前にゆかたの着装指導に関してトレーニングを積んだ学生の協力を得た。授業実践において着装技能の理解・習得に力点を置き、技能の理解・習得を目標に着装実習をすることが、着装による高揚感をもたらし、きもの文化への興味・関心を喚起させる効果があるとの仮説を立て、授業実践後にアンケート調査を行い、検証した。一定の成果が得られたので報告する。

2 研究方法

2.1 授業実践内容

2011年5月から6月にY大学附属K中学校において、家庭分野担当教員の協力を得て教育実習の一環で大学の実習生が2年生4クラス、男子87名、女子88名（計175名）を対象とし「ゆかたの着や、きものの構成や歴史の学習を通して、きもの文化に関心をもつこと」を目標に3時間（50分×3）の授業を実施した（Table1）。

Table1 学習指導案の抜粋

時間	学習内容	指導・留意事項・評価
1	きもの歴史・ゆかたの部位の名称や男女の違い、着つけの方法に関する学習（次回の着装実習の予習のため、教師がゆかたの着つけを示範しつつ、各部名称を確認）	・きもの文化に関してと、ゆかたの各部名称のプリント配布
2	ゆかたの着つけとたたみ方実習（実習前にATが示範する着つけを見てポイントを復習させた後、男女別にATの指示に従って全員着つけ実施。着装後に、着つけの技術や着装感に関するアンケート実施）	・体育館で実施 ・ゆかたおよび配布資料準備
3	ゆかたの帯結びの部分練習（時間が確保できた2クラスのみ）	・帯のみ用意
4	ゆかたの着つけを振り返りと、単元のまとめ・洋装と和装の違い・きものTPOに関する授業	・配布資料準備

1時間目には、きものやゆかたの歴史・ゆかたの部位の名称や男女の違い、着つけの方法に関する学習を各クラスの教室で行った。2時間目には、ゆかたの着装実習を行い、スペースが広い体育館あるいは合併教室を使用した。着装後に、着つけの技術や着装感に関するアンケートを行った。4クラスの内、2クラスは、授業時間の関係で、1時間分追加で授業が出来る

ことになり、教室での帯結びの部分練習の時間を追加した。3時間目の振り返りの授業は、再び各クラスの教室で行い、着つけの振り返り・洋装と和装の違い・きものTPOに関する授業とした。

2.2 ゆかたと着装の示範のためのATと教材の準備

生徒たちの身長を把握し、それに基づき、1人に1セット、ゆかたや帯などの小物を準備した。ATの学生3名には短時間にポイントを押さえながら着つけの演習を生徒たちの前でするため、授業実践に先立ち、着装DVDの視聴等でさらに着装トレーニングを実施した。

説明用の教材としてプロジェクトで製作したテキスト¹³⁾と着装DVD¹⁴⁾を準備し、前者は配布して活用した。後者は授業の限られた時間に使用するには時間がかかり過ぎたため、DVDはATの予習、復習用に使用するにとどめた。授業では前述の訓練したATの内、男女1名ずつが授業者の説明に合わせて示範した。体育館での着つけ実習の様子をFig.1に示す。



男物ゆかたの示範



女物ゆかたの示範



同時に実演しつつの着つけ指導の様子



たたみ方実習

Fig.1 体育館で着つけ実習をする様子

2.3 ゆかた着装後のアンケート調査内容

着装実習直後および夏休み明け（事後）に着装感や立ち振る舞いに関する項目、着装技能実習に関する自己評価、きもの文化に関する項目の全 23 項目について 5 件法で調査を実施した。なお、5 件法の尺度は（5: そう思う、4: ややそう思う、3: どちらともいえない、3: あまりそう思わない、2: あまりそう思わない、1: そう思わない）とし、5、4 の回答を肯定的な回答とした。

23 項目の直後・事後調査のデータがそろっている 4 クラス分の男女生徒 159 部（90.9%）を対象として、分析結果から得られた内容をもとに、授業の成果と生徒の意識変容について考察することとした。

3 研究結果

3.1 着装実習直後の回答結果と自己評価

3.1.1 着装技能に関する自己評価

着装技能の自己評価に関して、全体として肯定度は高く、特に女子では帯結びに対して 71%、おはしよりについては 93% が 4 か 5 の肯定的回答をしていた。

3.1.2 着装による高揚感に関わる自己評価

高揚感を示す項目である「ゆかたを着ると普段と違う気分になった」に対し、特に女子の高揚度は顕著で 93% が肯定的な回答をし、男子は 74% であった。また「また着てみたい」には女子は 93% が肯定的な回答で、男子は 65% であった。このことから高揚感が着意欲の向上に大きく影響することがわかった。また、「ゆかたやきものに興味をもてたか」に対し、男子が 75%、女子が 93%、肯定的に回答しており、男女に若干の差異はあるものの、授業をきっかけにほとんどの生徒がゆかたやきものに興味・関心を抱いたと思われる。

3.2 直後と事後の心境変化について

3.2.1 授業実践直後と事後の興味関心の変化

夏休みをはさみ 3 カ月経過後を実習事後とし、着装直後と事後に行ったアンケートにより、時間の経過により、どのように心境や興味関心、技能の意識が変化したのかを考察した。

「ゆかたをまた着たいか」は実習直後・事後ともにほぼ変わらず、78% が肯定的に回答していた。また、「きものやゆかたに関心をもてたか」に関しても、男女ともに直後と変わらず事後も肯定的であり、一度の

学習によって得られた興味関心度は時間が経過しても維持されるということが示唆された。しかし、「ひとりでゆかたを着ることができるか」という着装技能習得意識に関する項目では肯定的回答が直後は 66% だったが事後では 44% と半数を切っており、技能習得度が時間の経過とともに若干低下していた。長期的な技能習得には継続的な学習の必要であることがわかった。

3.2.2 授業実践直後と事後の高揚感と立ち振る舞い

直後の高揚感を示す「ゆかたを着ると普段と違う気持ちになったか」に対し、肯定的回答は 85% であった。また、「またゆかたを着たいか」には 78% が、「ペアの相手の印象が変わったか」では 64% が、肯定的に回答した。このことからゆかたの着装によって多くの生徒が着装実習直後に高揚感を得たことがわかる。しかし、「ゆかたを着ている自分は普段よりも素敵だと思う」には、ほとんどの生徒が否定的な回答（33%）か「どちらでもない」（47%）かに回答しており、中学生特有の思春期の羞恥心によると推察された。「立ち振る舞いに変化は起きたか」では肯定的な回答が直後・事後とも約 50% に留まった。本授業では、50 分間という限られた授業内で行ったため、着装・記念撮影・畳み方を行うのが限界であった。もし、十分な時間数を確保できれば、歩行練習や俳句をたしなむ、畳の上での作法を学習するなどの内容を取り込むことができるため、着装実習のみを行うよりも、より、きもの着装による高揚感を感じ取り、よりゆかたを着た自分の姿、立ち振る舞いの変化を実感出来たのではないかと考えられる。しかし、これらの実践には、より一層の教師の指導力が必要となるため、教師自身の事前の技能習得や準備が求められ、教師への負担を考えると、容易ではないことも予想される。

3.3 探索的因子分析結果

3.3.1 因子の抽出

事後の振り返り調査の技能・関心、着装時の気持ちと振る舞いの変化などの 24 項目を集約して因子を抽出し、それらの因子間の関連性を考察するため、全 24 項目を対象に探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。固有値 1.0 以上で抽出したところ、6 因子解が抽出された。しかし、第 6 因子目は帰

属する項目数が2項目で他の因子に丸められそうな項目であったため、因子数を5因子に固定して解析を行い、5因子解が得られた (Table2)。

第1因子は、「ゆかたやきものに関心をもてた」、「またゆかたを着たい」、「きものについてもっと知りたい」など8項目から構成され、「興味関心因子」と名付けた。第2因子は、「帯の結び方が理解できた」、「腰紐の結び方が理解できた」、「ひとりでゆかたを着ることができる」など4項目から構成され、「理解習得因子」と解釈した。第3因子は、「ゆかたの流行を店や雑誌でみるのは楽しい」、「オリジナルの着つけやアレンジはおしゃれで良い」など4項目から構成され、「流行肯定因子」と名付けた。第4因子は、「ゆかたを着ていると気持ちが高まる」、「ゆかたを着ていると普段と違う気持ちになる」、「ゆかたを着ている自分は普段よりも素敵だ」、など4項目から構成され、「高揚感因子」と名付けた。第5因子は、「伝統やしきたりよりも見た目や利便性のほうが大切だ」、「時代の流れとともにきものやゆかたが変化していくのは当然だ」、また第3因子にも属している「現代で着るなら現代風のきものやゆかたのほうが良い」の3項目から構成され、「伝統変化肯定因子」とした。なお、それぞれの累積寄与率は64.87%となった。

3.3.2 着装実践後の質問項目による因子間のパス解析

次に、因子分析の結果得られた5因子を潜在因子とし、各因子を構成する質問24項目を観測変数として潜在因子のうち、「興味関心因子」は他の因子からの結果として高まると仮定したのでパスの矢印を受ける方向のみのパスとしてパス解析を行った。その結果、男女一括での分析で有意な解析結果が得られた (Fig.2)。

パス解析の適合度指数について、CFIとGFIは0.9以上RMSEAは0.1未満が適合基準とされている。妥当性を検討したところ、適合度指標はGFI=0.810、AGFI=0.749、 $\chi^2=379.708$ 、df=243、RMSEA=0.059をそれぞれ示しており、上記の適合基準を満たしていた。またモデルの潜在変数から観測変数へのパス係数は、0.35～0.91であり、潜在変数は観測変数によって適切に測定されている。パス図で線が描けたパス係数はすべて有意である。

「理解習得因子」から「興味関心因子」へのパス係数が有意であることから仮説の「着つけの技能」の理解・習得度が高まるほど、「きもの文化」への興味関心が高くなることが示唆された。また、「高揚感因子」から「興味関心因子」へのパス係数も有意であり、係数が0.64を示したことから高揚感を高めることも興味関心を高めることにつながることを示唆された。し

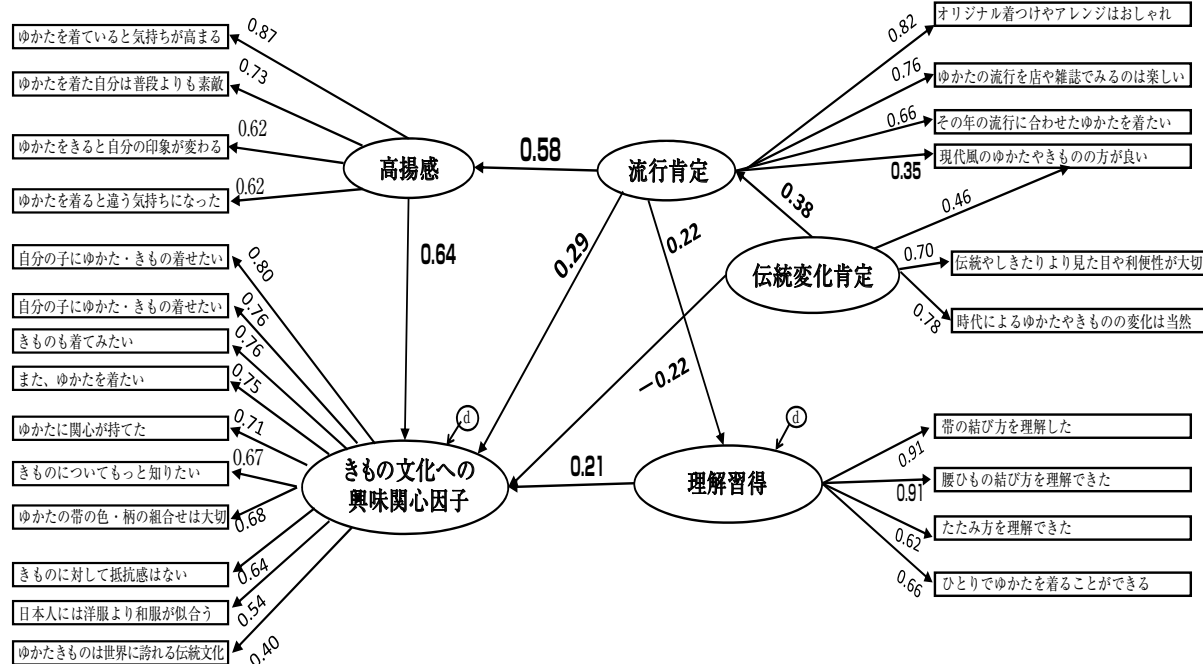


Fig.2 質問事項による因子間のパス解析結果

標準化推定値 χ^2 (df)=379.708(243),GFI=0.810,AGFI=0.749,RMSEA=0.059,パス係数はすべて有意確率5% ($p<0.05$) で有意

Table2 探索的因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV	V	因子名
① ゆかたやきものに関心が持てた	.794	.179	-.134	-.111	.181	興味関心
② また、ゆかたを着たい	.740	.035	-.158	.112	.196	
③ ゆかたやきものを着る機会増えたが良い	.737	-.014	-.083	.153	-.001	
④ きものも着てみたい	.736	.016	.220	-.096	-.086	
⑤ 自分の子にゆかた・きもの着せたい	.734	-.096	.039	.056	-.041	
⑥ きものについてもっと知りたい	.577	.105	.234	-.093	-.067	
⑦ ものに対して抵抗感はない	.518	.009	.062	.111	-.079	
⑧ 本人には洋服より和服が似合う	.494	-.047	.057	.034	-.262	
⑨ ゆかたやきものは世界に誇れる伝統文化だ	.191	.075	-.014	.131	-.085	
⑩ 帯の結び方を理解した	-.036	.931	-.049	.044	-.055	理解習得
⑪ 腰ひもの結び方を理解できた	.026	.883	.030	.003	.006	
⑫ たたみ方を理解できた	-.021	.618	.026	-.009	.072	
⑬ ひとりでゆかたを着ることができる	.160	.582	-.015	.028	-.039	流行肯定
⑭ ゆかたの流行を店や雑誌でみるのは楽しい	.270	.023	.644	-.021	-.104	
⑮ オリジナルの着つけやアレンジはおしゃれ	.330	-.137	.639	-.042	.098	
⑯ 現代風のゆかたやきものの方が良い	-.219	.081	.625	-.026	.340	
⑰ その年の流行に合わせたゆかたを着たい	-.158	.017	.548	.319	.087	高揚感
⑱ ゆかたを着ていると気持ちが高まる	.338	-.054	-.048	.650	.052	
⑲ ゆかたをきると自分の印象が変わる	-.059	.167	.116	.631	-.145	
⑳ ゆかたを着ている自分は普段よりも素敵	.176	-.078	.072	.586	-.024	
㉑ ゆかたを着ると違う気持ちになった	.295	-.023	-.079	.401	.089	
㉒ 選択時ゆかたの帯の色・柄の組合せは大切	.301	.019	.163	.386	.036	伝統変化肯定
㉓ 伝統しきたりよりも見た目や利便性が大切	.101	-.029	.017	-.080	.830	
㉔ 時代によるゆかたやきものの変化は当然	-.117	.016	.241	.047	.584	
累積寄与率 (%)	33.556	10.817	10.545	5.312	4.638	全分散：64.868
因子間相関	I	II	III	IV	V	
	I	-.	.319	.384	.617	-.059
	II		-.	.179	.166	.060
	III			-.	.443	.215
	IV				-.	.157

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

かし、技能習得を目指して着装ができるように努力する意識が、着装時の気持ちの高まり・嬉しさやまた着てみたい意識に結びつくという「技能理解習得因子」から「高揚感因子」へのパスは有意でなかった。因子得点の相関分析では両者に有意な相関があったため、

ばらつきの問題なのかもしれない。更なる技能向上を図る指導の工夫によって理解習得因子を高めることができれば、高揚感因子・興味関心因子の向上に寄与すると考えられる。流行肯定因子から高揚感へのパスと理解習得へのパスがいずれも有意で流行肯定因子が興

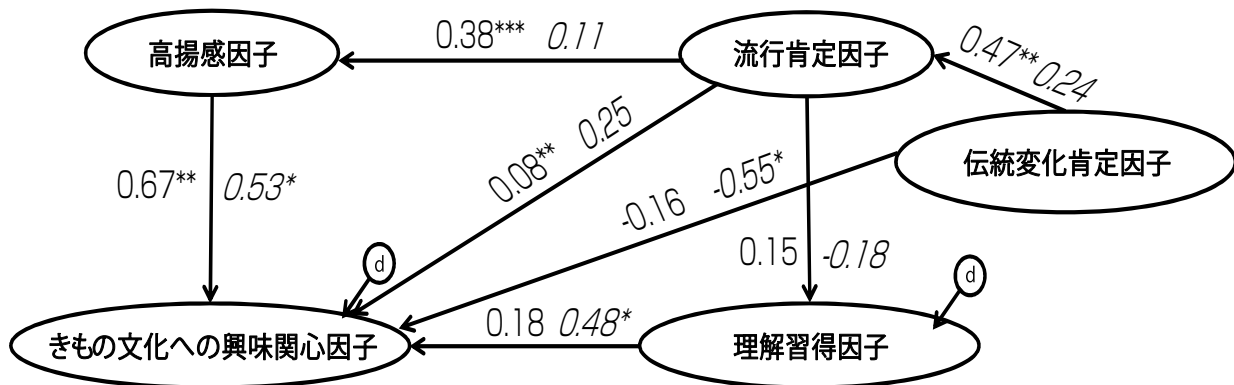


Fig.3 男女別の因子間のパス解析結果

(標準化推定値 $\chi^2(df)=837.449(488)$, GFI=0.813, AGFI=0.63, RMSEA=0.066, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$)
 パス係数の数値：左：男子生徒の場合、右（斜体）：女子生徒の場合

興味関心を高めるという間接効果がみられた。伝統変化因子から興味関心へは負の相関がみられ、伝統文化を大切にしている意識が高いほど、興味関心が高いといえる。

以上のように、共分散構造分析（パス図）による因子間相互の関連性の分析から、本授業の効果と今後の課題の方向性を検討した。解析の結果から、技能習得を目指して着装ができるように努力する意識が、「高揚感」すなわち着装時の気持ちの高まり・嬉しさやまた着てみたい意識に結びつくことが明らかとなった。

3.3.3 男女別のパス解析（多母集団同時分析）

因子分析で男女間に有意差が見られた因子があったため、男女差を多母集団の同時分析で検討した。（Fig.3）。

パス図の妥当性を検討したところ、適合度指標は GFI=0.813、AGFI=0.63、カイ二乗 =837.449、df=488、RMSEA=0.066 を各々示しているの、パス図は上記の適合基準を満たしていた。潜在変数から観測変数へのパス係数は、男子生徒では、0.39～0.90 で、女子生徒では、0.18～0.85 であり、潜在変数は観測変数によって適切に測定されていた。観測変数と潜在変数からのパスは省略した。

「伝統変化肯定因子」から「流行肯定因子」への係数は男子で 0.47** と有意で女子では 0.24 と有意ではなく、男女間で差異が見られた。伝統が変化することへの肯定意識と流行に対する肯定意識は項目が似た内容であるため、相関が高くなることが予想されたが、女子では相関が低かった。これは、女子のほうが「伝統やしきたりが大切である」と考える割合が男子に比べて高く、伝統変化への肯定意識があまり高くはないからだと考えられ、流行肯定への意識へも結びつきに

くいと考察される。「伝統変化肯定因子」から「興味関心因子」への係数に注目すると、男子では - 0.16、女子では - 0.55* と負の相関となった。このことから生徒たちは伝統文化が変化することには否定的で特に女子でその傾向が強い。女子は伝統文化をステータスと考える一方で、一般の衣服では流行にも興味があり、それらを別次元として捉えていると考えられる。

「流行肯定因子」から「高揚感因子」への係数は男子で 0.38*** と高い相関がみられ、女子では 0.11 と低かった。流行に対し肯定的な意識があることは、自分のファッション性や他者からの評価に対する意識が強いことが予想され、それが高揚感へと結びつくと考察される。

「高揚感因子」から「興味関心因子」への係数が男子で 0.67**、女子で 0.53* となった。アンケートの結果から女子のほうがファッションに対する意識が高く、ゆかたへの興味関心も高かったが、男子は女子よりもゆかたを着たときの高揚感から興味関心を抱く因果関係は強いといえる。また、「理解習得因子」から「興味関心因子」への係数が男子では 0.18 で有意ではなかったが女子では 0.48* で有意であった。女子は男子に比べ着つけの難易度が高いにもかかわらず、着装技能を理解習得した意識が自信へと結び付き、きもの文化への興味関心が強まったと思われる。また、男子では技能の理解習得ときものへの興味関心に有意な関係性が見出されず、授業の工夫の余地があることが明らかとなった。「理解習得因子」から「高揚感因子」へのパスは男女とも有意でなかった。

男女でのパラメータの一対比較を行うため、同じパスに対する検定統計量を調べた。Table3 の表の値の絶対値が 1.96 以上であれば、2つのパス係数の間に

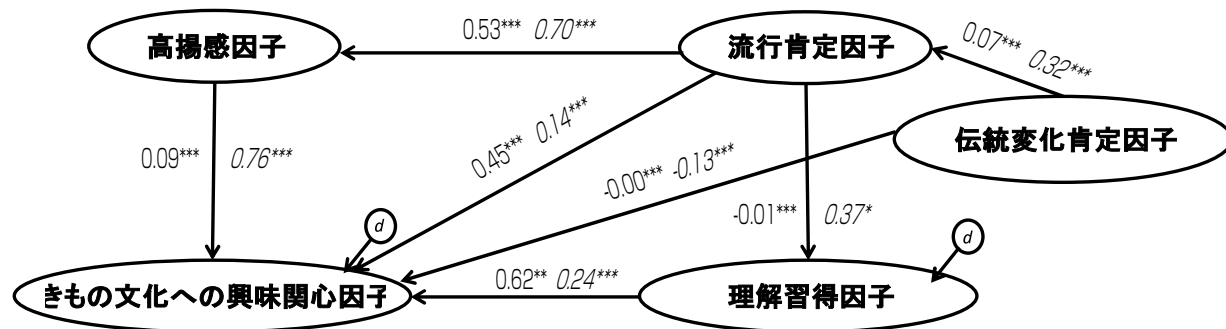


Fig.4 帯結び有無別の因子間のパス解析結果
 (標準化推定値 $\chi^2(df)=699.809(510)$, GFI=0.850, AGFI=0.758, RMSEA=0.048, * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$)
 パス係数の数値：左：帯結び部分練習有、右（斜体）：帯結び部分練習無

有意水準 5% で有意、絶対値で 2.33 以上であれば有意水準 1% で有意、絶対値で 2.58 以上なら有意水準 0.1% で有意と判断される。高揚感因子→興味関心因子と流行肯定因子→興味関心因子は 5% で、流行肯定因子→高揚感因子は 0.1% で有意差があると解釈された。

Table3 男女でのパラメーター対比較

高揚感 →興味関心	流行肯定 →興味関心	理解習得 →興味関心	流行肯定 →高揚感	理解習得 →高揚感
-2.16*	2.11*	1.00	-4.44***	0.39

* : $p < 0.05$ 、*** : $p < 0.001$

3.3.4 帯結び部分練習の有無によるパス図比較

帯結びの部分練習を 1 時間 (50 分) 授業で行い、授業数が計 4 時間であった 2 クラスと帯結びの部分練習を行わず授業数が計 3 時間であった。研究の目的とする「きもの文化」への興味関心を高めるための授業実践方法として、『「着装の技能」の理解・習得度を高めるために帯結びの部分練習を行うことで、「きもの文化」への興味関心がより高くなる』という仮説が成り立つか明らかにするため、グループ差を多母集団の同時分析で検討した (Fig.4)。

帯結び部分練習無しの場合では、「理解習得因子」から「興味関心因子」への係数が 0.24*** で有意となったが、帯結び部分練習有の場合の係数 0.62** よりも係数が低くなった。「流行肯定因子」から「高揚感因子」への係数が 0.70*** で有意となり、「高揚感因子」から「興味関心因子」への係数も 0.76*** で有意となった。すなわち、部分練習なしでは技能面よりもファッションとしてのゆかた着装による高揚感から興味関心因子が喚起される傾向が顕著に表れた。

以上のように帯結び部分練習の実施によって「理解習得因子」から「興味関心因子」の係数が高くなったことから着つけの技能理解面の学習を強化することにより理解・習得できた意識が高まり、それが自信へと結びつき、「きもの文化」への興味関心が強まったと考えられる。

すなわち、係数の向上から帯結びの部分練習をすることで、理解習得意識が喚起され、それが興味関心へとつながる可能性が示唆される結果となった。これまでの本研究を含むプロジェクト研究の先行研究により 1 回の着つけ実習では着つけ技能の理解はできても習

得までは十分ではないことが明らかにされている¹⁰⁾。本研究の実践でも、生徒たちは 1 回や 2 回の練習を実施しただけなので、自分の着つけ技能に十分に満足していない生徒もいたと考えられる。このことから、帯結び部分練習等の技能面の授業の充実の必要性が明確となった。

また、2 群のパラメーターの対比較を行ったところ、Table4 の通りとなった。2 群の間に有意な差がみられたのは、「流行肯定因子」から「高揚感因子」への係数だけであった。

Table4 帯結び部分練習有無でのパラメーター対比較

高揚感 →興味関心	理解習得 →興味関心	流行肯定 →興味関心	流行肯定 →高揚感	理解習得 →高揚感
0.571	1.259	-1.149	2.043*	-0.828

* : $p < 0.05$

3.4 授業担当者の評価

1 時間目のきもの文化に関する学習では、今までの学習内容と異なるということもあり、どのクラスも集中力が高く落ち着いた雰囲気となった。今までの経験と照らし合わせながらも、新たな知識に関心を抱いている様子であった。

2 時間目の着装実践授業では、教室内の授業とは違い、子どもたちの表情がとてもいきいきとしており、1 時間目に学んだ知識を活用しながら積極的に活動する姿が多く見られた。3 人の AT の協力などもあり、スムーズに行うことが出来た。また、子どもたちも心を開き始めてくれ、授業準備などを自主的に手伝うなどをしてくれた子どもがいて嬉しく感じた。体育館で授業を行ったことに関しては、広い空間でのびのびと行うということが出来るというメリットがあった。また体育館には大きな鏡もあり、自分の帯結びや後ろ姿を確認させることも出来た。しかし、その広さゆえ、教師の声が届きにくいというデメリットもあり、指示が届きにくいということがあった。また細かい説明なども、離れた位置の生徒からはわかりづらいといったこともあった。それとは逆に、音楽室で行った 2 クラスは一人当たりのスペースが狭く、窮屈な実践になってしまったが、生徒の注目を集めやすく、全体的なまとまりはあった。しかし、男女で別の部屋になってしまったため、男女のペースにずれが生じることとなった。3 人の AT をつけたことに関しては、教師一人では指導が行き届かないことが予想されていたの

で、授業を行ってみて改めて出来る限りの協力者に補助を求めることの必要性を強く感じた。しかし、ATにも十分な着つけの能力と指導力が必要であり、現場での授業ではなかなか協力者を得ることは難しいのではないかと思う。また、ATとの事前の入念な打ち合わせや技術習得を怠らないことが絶対不可欠であると感じた。着つけDVDを使用しなかったことに関しては、ATの模範を実際に生徒たちに見せることで、より注意を惹き付けられたのではないかと思う。

クラスのほとんどの生徒が興味津々で、しっかりと授業に取り組もうという意欲が見られた。「ゆかた」を着るのって難しい!」「せっかく着たのに脱ぎたくない!」「今年の夏、着てみようかな!」などの感想を多くの子が、それぞれに述べており、とても有意義な授業になったのではないか、と思う。出来ている子も、そうでない子も、楽しそうに行っていて、生徒たちの自然で無邪気な笑顔が多く見られた。

3時間目のまとめの授業では、前時の授業の集合写真などを見ながら振り返りをした。1時間目よりも多くの意見が飛び交い、活発で充実した授業となった。事前準備や計画など教師側の負担は非常に大きい、子どもたちにとっても自分自身にとっても、とても良い経験となったと思う。授業後は、達成感でいっぱいだった。

3.5 附属学校教諭の実習後の評価

今回の「ゆかた」の着装は、ほとんどの生徒が初めて取り組んだ学習でもあり、どの生徒にも新鮮なものとなった。特に大学との連携を図ることにより、教材や複数の指導者による授業実施は、公立の学校に比べ非常に恵まれた環境で行うことができた。今回のような教育実習中での取り組みは、普段の授業において個別指導の充実を図るための授業構成や指導方法の改善



教室での並び方



体育館での実習時の並び方
Fig.5 実習場所と生徒の並び方

にもつながった。教材の準備や指導者の技術的な面など課題は多く残るものの、今後の学習に向けて、非常に参考になる取り組みとなった。

3.6 授業実践後の反省会のみとめ

<学習環境・設備についての課題>

事前準備について

- ・訓練して技能を習得した複数のAT（生徒10名に1人）を募れば、十分に1時間でも着つけ実習の授業実践が可能という実証となった。一般校では、地域か、保護者の協力を仰ぐ体制づくりが現実的である。附属の場合は、附属と大学の連携の一環として、大学生のATを継続的に派遣できるよう着つけの技能習得を大学の被服実習の一環とすることも検討していく。
- ・ゆかたはサイズ毎に袋を色分けし身長順に並べ、生徒も身長順に並んで端から選ぶとサイズが極端に合わない事が減る。男子は対丈（着丈＝身丈）なのでサイズ適合性が特に重要である。
- ・視聴覚資料を用意する場合、直前にコンピュータ、DVDやプロジェクター等機器の動作確認をする。
- ・DVD・パンフレットは初学者にはやや高度すぎ、難解な所あるため、中学生向けの授業用に着つけの際のポイントを絞り込んだプリントを用意するとよい。

実習場所について

- ・体育館は鏡もあり、十分な広さがあったが、並びせ方が縦長に並びせたので、後ろの方の生徒にはATの示範が見えにくかった。この点は、音楽室で、横長に並んで前後男女2列という並び方が、ATの示範が良く見えた。また、教室の方が先生の声は届きやすく、声掛けで注意喚起がしやすい。

<指導上の留意点>

授業の目標設定および生徒への周知に関して

- ・技能教科としてのねらいはどこにあるのかを、最初にきちんと伝え、周知する。
- ・限られた時間数の中で技能面の習得・定着までを目標にすることは現状では難しいと感じられた。
- ・衣生活領域の他の学習とのようにつなげていくのが良いかを今後、検討する必要がある。

授業進行に関して

- ・帯結びの部分練習をする時間が取れたクラスでは、着つけの実習の時にスムーズに授業が進み、たまたみ方までが1時間の授業内に無理なく実践できた。
- ・ゆかたをはおる途中まで男女同時進行にし、時間短縮を図った。
- ・男物のゆかたの実習は2人のATが各々10人ずつ

担当し、半円形に囲ませて、実演しながら着つけさせたので指導が行きとどきやすく、帯結びの完成度が向上した。

- ・女物のゆかたの実習もメインの教師と1人のATの2名で各々10名ずつくらい担当した。二列に並んでの着つけで教師が巡視するやり方をした。男物の実践のように囲ませて実演しながらの着つけは実践してしていない。
- ・たたみ方の師範の時に、良く見えるところまで生徒を一旦集めて、師範できなかつたため、たたみ方が十分に周知できなかつた。
- ・実演時の説明で、パンフレットかプリントの図を確認させ、紙媒体の資料の活用を復習に用いるように声掛けする。
- ・限られた時間数の中で技能面の習得・定着は難しいと感じられた。
- ・衣生活領域の他の学習とのようにつなげていくのが良いかを今後、検討する必要がある。

4 まとめ

本研究の特徴は、複数のATとなる大学生を活用しての着つけ実習を含む授業実践にあった。過去2年間の授業実践を通して教師自身の「きもの」文化に関わる意識啓発と知識・技能の力量形成が重要であることが明らかとなってきたので、本学では、家庭科教員を目指す学生たちに2年生の被服実習の「ゆかた」製作から始まり留学生や海外の中学生・大学生対象の着装ワークショップや免許更新講習のATなど、着つけの技能を中心に「きもの」文化に対する意識啓発と技能習得のための様々な取り組みを行ってきた。それらに積極的にかかわった学生たちに授業を担当する実習生、ATとして協力してもらい、附属学校の教師との連携の元に教育実習での授業実践の機会をいただき、無事、一定の成果を収めることができた。附属と大学の連携の一環として、大学生のATを継続的に派遣できるよう着つけの技能習得を大学の被服実習の一環とすることも検討していきたいと思う。

附属学校という地域のリーダー的な実践校での実践であり、設備や教材などの学習環境、教師の実践力向上に向けての周りの支援、さらに生徒の質の高さ等々が整っているため出来た実践という面はあり、一般校ですぐに同じ実践ができるかということ、難しいところ

はあるかもしれない。しかし、授業担当者、ATともに、ほとんど「きもの」文化に関する基礎がなかった学生たちであったが、数年間での様々な実践の結果、「きもの」文化に関わる意識啓発と知識・技能の力量がある程度身に付き、環境を整えることにより、生徒に感動を与える授業実践が可能となった。したがって一般校でも、実習の場面では地域や保護者の協力を仰ぐ体制づくりを整えて行くことで可能となると考えられる。環境の許す範囲で是非、現場の家庭科の先生方に本授業実践の一部分でも授業の中に取り入れて、子どもたちの心に「きもの」文化を尊重し継承・発展する芽を育てるための実践にチャレンジしてほしいと考える。

また、本研究では、着装技能の理解・習得を目標に着装実習をすることが、着装による高揚感をもたらし、きもの文化への興味・関心を喚起させる効果があるとの仮説の基に、授業実践を行った。その結果、仮説を実証する結果が得られるとともに、ゆかた着装実習に関わる生徒の意識が分析された。さらに、授業実践に関わり、授業準備、授業の流れを含め多くの知見を得ることができ、今後の同様の授業実践に寄与すると考えられる。

謝辞

本稿で紹介した教育プログラムの開発は、文化ファッション研究機構の服飾文化共同研究として実施された。ここに、文化ファッション研究機構に感謝申し上げます。

また、附属鎌倉中学校校長の西村隆男先生、ご指導いただいた中尾由美子先生、附属鎌倉中学校主催の研究発表会でお世話になった尾崎誠先生他、附属鎌倉中学校の先生方、授業を担当し卒論として取り組んでくれた大西一恵氏、ATとして協力いただいた遠藤侑氏、川村友希氏、黒濱菜々美氏、統計処理の方法についてご助言いただいた千葉県立保健医療大学・井上裕光氏にこの場を借りて感謝の意を述べる。

本着装実習当日の様子について、教育新聞、2011年7月7日版に掲載された。多くの教育関係者に紹介されたことに感謝の意を表す。

引用文献

- 1) 文部科学省, (2006), 改正教育基本法.
- 2) 文部科学省, (2008), 中学校学習指導要領解説.
- 3) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー, 服飾文化共同研究報告 2009, 90-95 (2009)
- 4) 薩本弥生, 「きもの」文化の伝承と海外発信をめざすプロジェクト研究をめぐって, 大修館書店 大修館書店 家庭科通信 43号 Vol.15 No.3, 3-9 (2010.10)
- 5) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー, 服飾文化共同研究報告 2010, 18-23 (2010)
- 6) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化にかかわる教育プログラム開発の教育デザイン, 横浜国立大学教育デザイン創刊号, 100-103 (2010)
- 7) 薩本弥生, 海外レポート「英国でのゆかた着装ワークショップ」, 日本衣服学会 Vol.54, No.2, 105-106 (2011)
- 8) 薩本弥生, ゼミ紹介「きもの」文化の伝承と発信をめざした教育・研究活動紹介, 全国家庭科教育協会, 家庭科, NO.627-62 巻, 7-28 (2012) (ISSN 0910-8688)
- 9) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信をめざした授業実践報告書, 3月 (2012)
- 10) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー, 服飾文化共同研究最終報告書, 5月 (2012)
- 11) 薩本弥生, 川端博子, 堀内かおる, 扇澤美千子, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 井上裕光, 葛川幸恵, ゆかたの着装体験を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践, 日本家庭科教育学会投稿中 (2013)
- 12) 川端博子, 薩本弥生, 斉藤秀子, 呑山委佐子, 扇澤美千子, 堀内かおる, 井上裕光, ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み, 日本家庭科教育学会投稿中 (2013)
- 13) 斉藤秀子, 呑山委佐子編集, ゆかたがわかる, 文化ファッション研究機構 平成 22 年度服飾文化共同研究「きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発」研究グループ, (2011)
- 14) 薩本弥生他 5 名, 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラム用 e-learnig DVD, 服飾文化共同研究報告, 文化学園大学 文化ファッション研究機構 (2011)